

愛媛教職員組合研修会 「えひめ冬物語」

2018年2月11日(日)、研修会「えひめ冬物語」をホテルクラウンヒルズ今治で開催しました。その内容をお知らせします。

1 オープニングセレモニー

★ 愛媛教職員組合 紹介DVD上映 (活動のダイジェスト版)

春から夏にかけての教員採用試験の学習会。夏の研修会(国立療養所大島青松園での現地学習、宇和島市の教育集会所での学習など)。秋の愛媛・父母と教職員の教育研究会(第52回では、講演:森達也さん「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」また、第54回では、講演:魁生由美子さん「在日外国人の人権 一四国朝鮮初中級学校で見たこと・考えたこと」など)。冬の研修会(合理的配慮、LGBTの学習など)。教育改革アンケートの実施を踏まえての県教委・人事委員会交渉。数々の活動を積み重ねてきました。

★ 学校にも働き方改革の **風** を … 2018年は実行の1年に!!

教職員の長時間勤務の看過できない実態。ルールを守って、ICTやタイムカードによる勤務時間の把握を!! 集計・公表するシステムの構築を!! 詳しくは下記アドレスよりHPをご覧ください。



給特法 PR ビデオ
(給特法の問題点を知る
にはこちらから)

youtube より



演奏の様子

★ 弾き語り: ガチャピンの相棒

幸せそうな人たち 犬塚康博(詩・曲)・加川良(歌)

♪ 若い頃は ただそれだけで 全ての事がゆるされて
あやまちさえも美しく わがままであれば あるほどに……。
幸せそうな人たちは 泣いて笑い花を咲かす
生まれた時から僕たちは 減っていく道に花を飾る ♪ ♪

《参加者感想まとめ》 魂のこもった歌! 選曲も素敵でした。合間のトークも絶妙でした。
ギター演奏は組合の顔となっています。いつもテーマを考えて、メッセージとして伝えている。

2 実践交流

1. 私の体験（家畜とのかかわり） 報告：加地 理司（中学校）

家業は農業にプラスして酪農を営んでいた。乳牛を飼っていたのである。高校生くらいまで、エサやり（ワラ・飼料・果物や野菜の残菜等）やおがくずを取りに行ったりして、毎日手伝っていた。牛の種付けや出産のシーンを何度も見た。また、牛舎からトラックに乗せられ出荷させられる牛も何度も見た。牛舎から連れ出された牛がどのようになったか、よくわからないまま教員になった。同和教育との出会い（うずしお会や日教組の研修など）の中で家畜の処理施設の話が出た。出荷した牛のその後を知りたいと思うようになり施設見学をした。衝撃的であった。映画『ある精肉店のはなし』の上映会にも参加した。インパクトが強くとっても衝撃的だった。牛の処理の部分だけでなく、被差別部落の産業として当時の人がどのような思いで仕事に携わっていたのか。動物の命を人間が食としていただく。ということをつなげて考える。

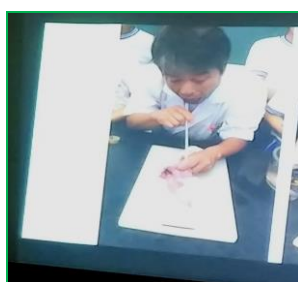


発表の様子

《参加者感想まとめ》

家業の一つだった酪農に触れながら、自身の体験した生命との出会いを、その後の大人になってからの同和教育への取組みの中で紡いでいったレポートで、とても伝わるものがありました。実生活・実体験（牛・鶏）の話、なかなか最近では聞かれない話でした。子どもたちに語っているのでしょうか？とても素晴らしい話です。

2. 食と命をつなぐ 報告：田中 正史（小学校）



実習の様子(映像より)

小学4年生、「ニワトリの手羽先の観察」の理科と「命をいただく」の食育の2時間の授業をしています。骨・腱・筋肉・関節を観察し、筋肉を動かして羽をパタパタさせます。命を使った授業なので無駄にはしません。栄養教諭の指導のもと、スープにしておいしく頂きます。6年生ではブタの肺と心臓の観察。肺に空気を入れてふくらませます。

生き物は、命あるものを食べて命をつないでいます。自分が食べているものが命であることを意識する機会をつくることで、子どもたちに、命を食べていることを実感させたいと考えています。

《参加者感想まとめ》

質問が多く出たように、解剖の詳細が知りたくなる内容でした。機会がありましたら解説的な報告を期待しています。「食と命をつなぐ」は、すばらしいキーワードですね。手羽先・肺や心臓などの準備が大変だと思いますが、いつも真摯な態度で取り組まれています。

3. 食肉産業と人権 学習プログラム 報告：堤 剛（中学校）

私たちは、普段肉を食べ、革製品を身につけています。それなのに、その生産過程で働く人を差別したり屠場を忌み嫌ったりすることは、矛盾した許されない行為です。自らの命をつなぐために、他の生き物の命をいただいています。だからこそ現実をしっかり聞いて、見て、受け止めていく事が大切です。

食肉センターを見学した中学生が「この作業の様子を見たことのない人や、牛を解くことにけがれ意識を持っている人に見てもらいたいです。きっと考えが変わると思います。僕も見学の機会がなければ、きっと間違った考えを持っていたに違いあ



集中。さあ発表

りません。」と感想を書いています。

偏見や予断やイメージで、物事を考えず、事実を基に正しく理解することが、人権課題を解決するためには必要です。

《参加者感想まとめ》

生徒たちに「今」「ここで」の問題として、出会わせようと試みた「食肉産業と人権学習プログラム」とともに、今回の研修会「えひめ冬物語」のテーマにつながるすばらしい提案だったと思います。命の大切さを伝えるために動いている。組合のつながりで、見学の段取りを整えているところも素晴らしい。

レポート発表全体の感想 = 実践力・自らの生き方・考え方・教育観を示していただけました。

3 上映会「ある精肉店のはなし」 監督: 瀬川 あや(はなぶさ あや) ・ 製作: やしほ映画社

大阪貝塚市での屠畜見学会。牛のいのちと全身全霊で向き合うある精肉店との出会いから、この映画は始まった。家族4人の息の合った手わざで牛が捌かれていく。牛と人の体温が混ざりあう屠場は熱気に満ちていた。店に持ち帰られた枝肉は丁寧に切り分けられ店頭並ぶ。皮は丹念になめされ立派なだんじり太鼓へと姿を変えていく。家では家族4世代が食卓に集い、いつもにぎやかだ。家業を継ぎ7代目となる兄弟の心にあるのは、被差別部落ゆえのいわれなき差別を受けてきた父の姿。差別のない社会にしたいと地域の仲間とともに、部落解放運動に参加するなかでいつしか自分たちの意識も変化し地域や家族も変わっていった。

2012年3月、代々使用してきた屠畜場が102年の歴史に幕を下ろした。最後の屠畜を終え、北出精肉店も新たな日々を重ねていく。



“いのち”を食べて人は生きる。“生”の本質を見続けてきた家族の記録！！

《意見交換》

- 実際の映像を見て食べるということ、命をいただくということ、昔は分業が発達していなかったもので、全て自分たちでしていた。改めて肉をいただくということを考えることができた。
- この家族は大変明るい。前向きに生きている。仕事に関しても解放教育に関しても誇りを持っていることを感じた。誇りを持っている人は、こんなにも輝けるのだと思った。自分が人に輝きを与えることができるだろうかと思った。自分の生き方に誇りを持って生きているのかと、自分自身に問いかけることができた。
- 命をいただくという絵本を朗読劇で実践した。この絵本に出てくる坂本さんは食肉解体の仕事がいやだった。揺れていた。仕事が嫌だということに校長先生が引っかけた。そんな校長先生は肉屋をしていた家の子であった。「父親は本当に誇りを持って仕事をしている。だから、坂本さんが、仕事が嫌なのか理解できない。」と言った。大げさにせず淡々と仕事をしている北出さん。私たちが学校で仕事しているのと同じように淡々と作業する姿が取り上げられていた。人権劇を実践した。劇のなかに結婚差別のくだりがある。ビデオの中にも結婚について取り上げられていた。ドキドキして観たが、人が良ければ…。ということだけで、ほっとした。だいぶ世の中変わってきたのかなと思った。同和教育の成果だと思う。ある校長先生は「もう一息だ。」とよく言われている。生徒たちに「差別をなくす最終ランナーだ。」と

も言っている。もちろん根強い問題も一方であると思うが、明るい展望も見ることができてよかった。

・解放教育と生活綴り方をつなごうとしているある先生は、「想像力の欠如が差別を生み出す。」とよく言われている。

・松山で上映会をした時は監督の講演もあった。撮影する中で編集する中でカットされた映像もたくさんあった。どう編集するのか？撮っていいのかどうか？祭りや盆踊りの場面でココはムラだと言いながら撮っている。映画に出るということは、永遠に自分たちは、被差別部落の人間だと宣言しているようなものだ。その上で明るく展望を見いだして、胸張って生きている力強さを感じた。見せたくない部分もあると思うが、撮影上の苦労話も聞いたが「案外悩まなかった。」と言っていた。歴史を切り開く部分なのかと思った。北出さんのお人柄もあるのでしょう。

・最近思っていることは、これまでの学校教育では 20 才ぐらいで希望をなくしてしまい、自殺の方向に向かわせるようなことを私たちはしてきているのではないかと、自問している。20 代の死因の一番は自殺。振り返らないといけないのではないかと思っている。『我々が誇りを持って生きて、生き生きした表情で子どもたちと関わって、明るい気持ちで毎日を過ごす。』ということが重要だと思った。そういう姿を見せることで、大人になりたいという気持ちを子どもに持たせることができるのではないかと。人権を学ぶということは、まだはっきりはつかめていないが、一番勉強しないといけないのは自分でないかと思った。

・ここに来るとホッとする。受け入れてくれるというのが大きい。部落解放運動と組合の活動が重なる。皆さんを見ていると誇りを持っているので輝いて見える。若い子に声をかけた。意外に「研修会」参加へのハードルは低くなっている。



《参加者感想まとめ》

大阪貝塚市のこの被差別部落といわれるコミュニティのすばらしさが、北出精肉店という家族総出でおこなう生産直販方式の仕事の営みを通して見事に描かれていて、観る私たちに大きな力を与えてくれる映画に仕上がっていたと思います。それは宇和島時代に暗い少女時代を過ごしたという、お嫁さんもこのコミュニティの中で生き生きとしていますし、この家族のお父さんにあたる方が「ボロは着ても心は錦。元気と勢いとハッター。」だけで生きていたという生き様の値打ちにも心打たれる思いです。またこの店の店主が若い頃に「水平社宣言」の文言が、大きな力となった。というくだりにも解放運動の力を教えられるようでした。

普通に生活している家族の様子を描きながら、ふと影を落とす「部落差別」の現実にとキツとしたりしながら観ました。同和問題、食育……。いろいろな切り口から発見のあるすばらしい映画でした。

差別をなくす最終ランナーにつなげましょう。誇りをもっている人は輝いている！ 誇りをもって生きていく人になりたいです。

子どもたちと教職員の生活を守るため、共に考えましょう！

私たち愛媛教職員組合は、年に数回、研修会（研究会）を開催し現場での力量を高めています。ぜひ、ご参加いただき共に学びましょう。

質問や感想がございましたら、お気軽にご連絡ください。

TEL(089)924-4546 / FAX(089)924-4403 / e-mail jtuehime@lime.ocn.ne.jp

HP <http://jtuehime.sakura.ne.jp/>

愛媛教職員組合 書記長 堤 剛

